

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 金児 恵

本論文は、日本におけるコンパニオン・アニマル（家庭で人間の伴侶として飼われるペット；以下「CA」）が人々の精神的健康と対人関係に与える影響を、社会心理学の観点から体系的、かつ実証的に検討したものである。その際特に、CAが飼主に与える効果を検討するにあたり、その二者関係のみならず、彼らを取り巻く社会的ネットワークの中に位置づけるというユニークな分析枠組みを採用して、新たな知見をもたらした意欲的な論文である。

従来のCA研究の限界の一つは、それらの多くが、CAと飼主の閉じた二者関係に分析対象を限定したことである。それに対し本論文は、CA飼育が飼主を取り囲む他者に及ぶ影響、並びに、周囲の他者、広くは社会、の飼主に対する反応などマクロレベルの視点を新たに導入した。また、従来のCA研究の多くは欧米において行われてきたが、ここでは、一貫して、CAとの絆の強さは飼主の心身の健康や社会的適応に望ましい影響を与えることが見出されてきた。しかし日本においても果たして同様の効果が見られるか否かは未解明の問題であった。本論では、CAを、飼い主に様々な情緒的・道具的サポートを与えることによって精神的健康を促進する、また、対人関係を媒介する「他者」、すなわち飼主の社会的ネットワークの一成員と捉えた上で、CAが日本人飼主の精神的健康に影響を与える過程を6つの実証研究によって体系的に解明している。さらに、これらの研究は、近年注目を集めているマルチメソッド・アプローチを採用し、郵送調査、質問紙実験、公開データの二次分析といった定量的研究と、インタビュー調査という定性的研究を必要に応じて効果的に組み合わせているという点で、研究方法論の観点からも高く評価される。

実証研究の結果、(1) これまで“強い”～“弱い”絆の一次元でしか語られてこなかった人とCAとの関係性には、「基本的絆」と「依存的絆」という質的に異なる2つの次元が存在し、この2種類の絆は、飼い主の精神的健康や対人関係に異なる効果を及ぼすこと、(2) 基本的絆は強いほど、CAからのサポートや対人ネットワークが増加する結果、飼主の精神的健康に正の効果をもたらすこと、(3) 一方、依存的絆が強まると、CAの躰が甘くなることで周囲の他者からの否定的な反応を引き起こすために対人ネットワークが縮小したり、「ペットが社会的に受け入れられていない」との認知を引き起こしたりする結果、飼主の精神的健康に負の効果があること、が見出された。

近年の少子高齢化、生涯未婚者や子どものいない夫婦の増加に見られる家族規模や構造の変化、ならびに、都市部に著しい地域社会の崩壊は、従来家族を中心として構成されてきた人々の社会的ネットワークの基盤を弱体化させてきた。それに伴いCAのサポート源としての重要性が注目されている。そうした中、人とCAとの関係性やその影響過程を解明することは今後の社会心理学の重要な課題であると共に、社会的重要性も高い。

本論文は、縦断的研究を行いCAに対する絆と精神的健康の因果関係を特定することや、依存的絆とそれを生み出す過程の汎文化性と文化特殊性を検討し、論拠の強化を図る必要があることなど、今後の課題をいくつか残している。しかし、本論は日本において社会心理学的観点から行われた、人と動物の関係に関する初めての体系的な博士論文であり、極めて重要な貢献と認めることができる。以上のことから、本審査委員会は本論文が博士(社会心理学)の学位にふさわしいものであるという結論に達した。